
山麓荘殺人事件

上杉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山麓荘殺人事件

【Nコード】

N8644M

【作者名】

上杉

【あらすじ】

警部達は山麓荘泊まりに行った。しかしそこでなんと殺人事件が

...

1 到着

今日は警部”股原学（56）”、”刑事の射越隆男（47）”が遊びに行った。

警「刑事、着いたで。」

関西弁の警部が隣の席に座っていた刑事の肩を揺すった。

刑「ふあ？」

刑事は寝惚けているようだった。

警「函館空港に着いたってゆうてるんや！」

警部は声を荒げた。

刑「ふえ？」

しかし、まだ刑事は寝惚けていた。

警「さつさと起きんかい！」

警部はさらに声を荒げた。

刑「ほへ？」

それでも刑事は寝惚けていた。

刑「がはっ……ゴホゴホ……てめー何しやがんだ！」

刑事は咽てからようやく目を覚ました。

警部の強烈なボディーブローが刑事のストマックを直撃した。プロボクサーでも一発K.O.間違いなしの見事な右ストレートだった。警「刑事が起きひんのが悪いんや。」

刑「だからって、ゴホゴホ……普通、寝てるところにこんな強烈なボディーブローを食らわす奴があるかよ？ ショック死したらどうしてくれんだよ？」

警「心配せんでええよ。優一の骨は俺が拾ったるから」

警部は至って笑顔で言っただけ。

刑「……」

刑事は「それだけは勘弁してくれ」といった表情をしていた。

森「クス……あなた達って、本当に面白いわね。見ていて飽きない

わ。観察日記をつけて養母さんに送ったら、喜んでくれるかもね。

興味深い素材だってね。母の日のプレゼントにピッタリかもしれないわ。それはともかくとして、刑事さんだって悪気があってやったわけじゃないんだから許してあげなさい。これは彼女なりの愛情表現なのよ。ただ照れ隠しをしているだけなんだから。」

警「も、” 森大麒（35）” さん、そんなことあらへんって！」

しかし、その言葉とは裏腹に警部の顔は秋の紅葉シーズンよりも一足早く赤くなっていた。

森「刑事さん、もう少し正直になっても良いんじゃないくて？」

刑「……。」

客「あの……お取り込み中の所を大変恐縮ですが、空港に着きましたので……。」

見回りに来た客室乗務員に降りるように促された。警部にとってはまたとないグッドタイミングの助け船となったのだ。

警「すみません。すぐに降りますから。」

刑事達は慌てて飛行機を降りた。

刑事・警部・森の3人は函館空港に来ていた。彼らはこれから山奥のペンションに行く予定だった。本当は宇川という人が学者仲間と行く予定だったのだが、2人共、風邪で寝込んでしまったので記念に代わりに刑事達が行くことになった。本当は、森は宇川の看病をするつもりだったのだが孤独原が看病を買って出て、せっかくだからと森も一緒に行くように言われたために、森も同行することになったというのだ。

3 時間後

刑「……まったく、何でこんな山奥に建てんだよ？来る客の身にもなってみるよな！」

森「良いじゃない？これぐらい山奥の方がゆっくりできるんじゃないかしら？」

警「森さんの言う通りや。刑事には風情っちゅうもんが分からへんのか？」

刑（風情だあ？ただ、金がなくて土地が安かったからこんな山奥に建てたんじゃねーのか？）

寝惚けている所に強烈なボディブローを食らった刑事はすごぶる不機嫌だった。

芋「いらっしやいませ。宇川様の代わりに来られた宇川様三名様です
ね？」

刑「ええ。」

芋「遠路はるばる『山麓^{さんろくそう}荘』にようこそお越し下さいました。私はこのペンションのオーナーの”芋川貴純（48）”と申します。以後お見知りおきを。」

警「こちらこそ、お世話になります。」

2 再会

刑事達は中へと案内された。入ると大きな空間、真中にテーブルがあり、階段を昇った二階は個室になっていた。

そしてある人物と再会した。

固「やあ、刑事君達じゃないか？」

警「固宮警部、どうしてここに？」

そこには”固宮信良（57）”・警部・”高橋秋子（54）”が座っていた。

高「夫婦で旅行なのよ。」

固「秋子さん……。」

高「お義母さんがたまには2人きりで旅行に行つて来いって言うから来たんだよ。」

高「とか何とか言つて、孫が可愛いだけなのよ。学が可愛くつてしようがないみたいだからね。『私が学の面倒を見ていてあげる。』

とか何とか言つてたからね。学はもう高校生だつていうのに、未だに孫離れできないんだからね。はははは。」

学とは高木夫妻の娘で古原学のことである。

固「まあ当然だろうな。学は生まれた時から今まで秋子さんとそっくりに成長してきたらしいからね。お義母さんはお義父さんが殉職じゅんしよくなされてから女手1人で秋子さんを育てきたんだから。」

警「そうですね……。」

刑「ところでそっちの子は？」

宮「初めまして。私は宇川君達の家に住んでいる”宮不徹（60）”と申します。私は宇川の親戚で、彼の家で暮らしています。」

森は毎度お馴染みの自己紹介をした。

森「元々ここには宇川達が来る予定だったのですが、風邪を引いてしまったので、私達がその代わりに来たんですよ。やるわね、刑事君。こんな美少女を2人も旅行に連れて来るなんて。でも、二股は

止めなさいよ。女の嫉妬は怖いわよ。」

宮「そ、そんなんじゃないですよ。」

警「まったく、刑事ったら何も分かってないんですよ。せやろ？ 刑事？」

刑「私はただの友達です。それに孤独原君のお目当ては刑事さんですから。ねえ宇川君？」

警「てめーまで、何を言ってやがるんだ？」

高「あらあら、良いわねえ？ 若いつて。でも警部、気をつけなさい。刑事君のお父さんの宇川君もかなり鈍感だったって親戚が嘆いていたから。」

警「分かっています。」

刑「……」

ここは黙秘するのが得策と考えた刑事は黙っていた。

芋「刑事さん。」

刑「オーナー、どうしたんですか？」

「こちらの方を紹介しておこうと思ひましてね。」 川鵜貴純（51）
「さんです」

川「初めまして、宜しく。」

刑「ああ、こらこそ宜しくお願いします。」

午後7時

芋「皆さん、食事ができました。」

ぞろぞろと人が降りて来た。

芋「あれ？」 石森大輝（36）「さんは？」

固「さあ？ 寝てるんじゃないですか？」

警「石森大輝さん？」

固「お客さんの1人です。」

警「へえ……」

芋「では、起こして来ましょう。彼は夕食ができたら、起こしてくれと言っていましたので。」

芋「石森さん？ 石森さん？ 夕食ができましたよ！」

しかし、部屋の中から反応はない。

芋「あれ？ おかしいな……鍵はかかっていないみたいだな。」
オーナーはドアを開けた。すると……

3 賭け

芋「あれ？ おかしいな……鍵はかかっていないみたいだな。」

オーナーはドアを開けた。すると……

芋「！」

オーナーの表情は固まってしまった。

警「どうしたんですか？オーナー？」

続いて警部が中を覗くと……血塗れの女性の死体^{のそ}があつた。

芋「石森さん！」

警「オーナー！入らないで！現場を荒さないで下さい！」

芋「現場？ということは……」

刑「ええ、これは……」

警「『立派な殺人事件』と言いたかつたんだろ？刑事君？」

刑「ああ……え？」

工「そういえば、自己紹介がまだだったね。ボクは”工戸川乱歩（18）”。探偵さ。」

警「探偵？」

工「そう。君達と同じ高校生探偵。こんな所でボクの知的好奇心を興奮させるものがあつたなんてね。」

警「てめー、ふざけんな！人が1人死んでいるんだぞ！」

警部は息をたてた。

工「では聞くけど君はただ正義感からのみ探偵をやっているって言うのかい？」

警「それは……っていうかワシは高校生でも探偵でもないぞ。」

工「せっかくだからボクと賭けをしないかい？」

警「賭け？」

工「そう、ボクと君のどちらが探偵として優れているかをね。」

警「何？」

工「賭けの対象は……刑事さん……ボクが勝った暁^{あかつき}には君は刑事さ

んから手を引く。ボクが負けたら……探偵を辞める……これでどうかな？」

警「んだと。」

工「怖いのかい？負けるのが。」

森「ちよつとあなた、好い加減にしなさいよ。大体刑事さんだつて……。」

警「ええやろ。乗つたらやないか。刑事が負けたら、あんたの彼女やろつと、嫁やろつと何にだつてなつたらやないか。」

森「服部さん、あんた自分の言っていることが分かつているの？」

警「孤独原君、君はどうだね？警部さんは承諾してくれたよ。」

刑「上等だ。やってやろーじゃねーか。オレはためーのような奴にはサラサラ負ける気がしねーぜ。」

工「賭けは成立だね。刑事さんも宜しいですね。」

刑「もちろんや。」

森「ちよつと2人とも何を考えているわけ？」

工「森さんは今回、手を出さないで下さい。そちらの方は別に探偵じゃないようですから、そして相応ふさわしくないようですから。宜しいですが。」

警「それで本当ーにええんやな？」

工「ええ。」

警「刑事、負けたら承知せえへんよ。」

刑「ああ、オレは絶対に負けない。心配するな。」

警「今回は任せたで。」

森「ちよつと刑事君、どうしたのよ？」

工「あいつは人が死んだことを何とも思つてねー。あいつの頭を冷やしてやるのさ。」

森「そういえば刑事君、これが他殺つてどういふことなのかしら？」

警「ああそのことか？ドアの内側にはギリギリまで血がついているけどドアの外には全く血がついてなくて血痕けっこんが途切れている……。」

森「でもそれだけじゃ……。」

警「確かに誰かが気に留めずに拭いたかもしれない。でも決定的な
のは凶器がないってことだ。」

森「そういえば……。」

警「だろ？」

4 事情聴取

警「事件をまとめた。被害者は石森大輝。死因は頸動脈切断けいどうによる失血死。指の先まで死後硬直が進んでいることから死後約5〜6時間経過。つまり死亡推定時刻は午後0時頃〜午後1時頃の間ということか。石森が殺された部屋では高橋警部による現場検証が行われていた。崖崩れのため、警察がいつ到着するか見通しが立たなかったからである。」

刑（間違いないな。オレも調べたけど、死亡推定時刻は警部の言う通りだ。）

刑事は無言で高橋警部の現場検証を見守っていた。

高「あの……念のためにお聞きますが、皆さん、午後0時頃〜午後0時頃の間は何をしていらっしやいましたか？」

高橋警部はいつもの習慣で手帳を横にしながらメモを取る用意をした。

宮「俺は……お分かりですよ？高橋警部と秋子さんと午後0時30分28秒から午後1時32分13秒まで話をしていましたよね？」

高「ああ。確か、俺の時計の時間を言ったら君が自分の時計の時間を見せてくれたっけ？」

宮「俺の時計は年に0、00001秒しか狂いせんから。参考までにと……。」

警察は自分の懐中時計を取り出して言った。

川「僕達がここに着いたのは午後4時頃です」

刑「それは間違いないです。私が刑事君達を出迎えましたから。」

川「だったら、函館空港に確認して下さい。僕達は函館空港午後1時15分着の飛行機に乗って来ました。降りる時に客室乗務員の方に声をかけられましたので、確認して下さい。この通りチケットの残りもありますし。」

刑事は搭乗チケットの残りを取り出した。

高「ということは、アリバイがないのはオーナーと川鷗さんの2人ということに……」

高橋警部は手帳にメモしながら言った。

高「そうみたいですネ。」

オーナーは高橋警部の相槌あいづちを打った。

高「この辺りは人の出入りは？」

高橋木警部が尋問した。

芋「このペンションに来る以外に人には一切来ません。」

高「となると、オーナーか、川上さんのどちらかが犯人ということに……。」

高橋警部は言いづらそうに言った。

翌朝

高「川鷗さん、石森さんとは面識ありましたか？」

高橋警部は手帳を手にながら尋問した。

川「ええ……元恋人でした。」

高「え！男同士で恋人！その話は置いて、オーナーは？」

芋「いいえ。」

高「お2人共石森さんの部屋には入りましたか？」

高橋警部のこの質問にはオーナーが「いいえ」川鷗が「はい」と答えた。

高「……すると川鷗さんだけが石森さんの部屋に入ったということですね。」

高橋警部は手帳にメモしていた。

高「川鷗さんと石森さんはいつからここに？」

川「俺は今日の午前11時に来ました。」

芋「石森さんは今日の午前10時に来ました。2人共、間違いないです。台帳に書き込んでもらってありますから。」

高「ありがとうございます。」

高橋警部はオーナーと川鷗に捜査協力に対しての礼を言ってその場

を後にした。

高（まあ取り敢えず凶器を特定しないことには始まらないな。）
刑事の足は階段へと向いていた。そして二階の個室を調べていた。

5 仕組まれた推理

刑「ん？（そういえばこの部屋には花瓶がねーよな？石森さんの部屋にはあったのに……。）」

刑事は全部の部屋を見て回った。

刑（やつぱりそうだ。花瓶があつたのは石森さんの部屋だけだ。）

刑事は食堂にいた川鵜に尋問を始めた。

刑「川鵜さん、ちょっとお聞きしたいのですが……ということはなかつたですか？」

刑事は何かを川鵜に確認した。

川「ああ、そうだよ。よく分かつたな？」

川鵜は刑事の期待通りの答えを述べた。

刑「ありがとうございます。」

刑事は川上に礼を言つてその場を後にした。

警「ん？これは……どうやら我々の勝利だな、孤独原君。」

警察は川鵜の部屋で1人勝ち誇っていた。

そして……

警「オーナー、巻尺とヤスリをお借りできますか？」

芋「ああ、これで良いかい？」

オーナーは工具箱から巻尺とヤスリを取り出して、警察に渡した。

しかし、事件を解決したと確信していた警察はオーナーの瞳に宿っていた鈍い光を見落としていた。

警「ありがとうございます。」

警察はオーナーに巻尺とヤスリを借りた礼を言つてその場を去つた。刑「ん？花が枯れているな。変だな？別に昨日はそんなに寒くなかつたし。」（なるほど……そういうことか。それにこれは……でも、そうするとあれは一体どういうことなんだ？）

刑事は辻褄^{つじつま}の合わないことに頭を悩ませていた。そしてついに……

刑「警部、犯人が分かりました」

警察は高橋警部に自身たつぷりに言った。

高「そうか？」

高橋警部は安堵^{あんど}したように聞き返した。察は警視庁刑事部長である工戸川警視長の息子で、今までに数々の難事件を解決してきたからである。

刑「そうですね……現場の隣の川上さんの部屋に全員集めて下さい。」

警察は高木警部に川上の部屋に全員を集めるように言った。

警（何？まさか工戸^{そは}川の奴……。）

2人のやり取りの傍^{そば}で聞いていた刑事はある可能性を懸念^{けねん}していた。

川鵜の部屋

刑「僕には分かりましたよ。石森さんを殺害した犯人が。」

警察が推理ショーを始めた。

高「一体、誰なんだ？このとても良い頭脳の持ち主にも解けなかった難問がお前なんか解けるか！？」

高橋警部が尋ねた。

そして…

刑「石森氏を殺害した犯人、それはあなたです！川鵜さん！」

警察は川鵜を指差した。

川「！」

犯人だと言われた川鵜は硬直した。

刑「認めて頂けますね？」

6 トリック

犯人だと言われた川鵜は硬直した。

刑「認めて頂けますね？」

警察は穏やかな口調で自白を促した。

川「どうして、オレが犯人なんだ？」

川上は察に聞き返した。

刑「無駄ですよ。私はあなたの部屋でこれを発見したんですから。」

察は巻尺を取り出した。

刑「これは巻尺です。そしてここにもう一つオーナーにお借りしてあります。これをヤスリにかけると……」

警察はオーナーに借りた巻尺にヤスリをかけ始めた。

刑「できた。警部、この布をピンと張って持っていて下さい。」

警察は高橋警部に白い布を渡した。

高「ああ。」

高木警部は言われた通りに白い布をピンと張って持った。

シャア

察が巻尺を振り下ろすと白い布は真二つに裁断された。

刑「どうです？これなら頸動脈けいどうみゃくを切断できるでしょう？」

警察は得意満面に川鵜の方を見た。

高「なるほど。」

高橋警部が相槌あいづちを打った。

刑「これは川鵜さんの部屋で発見したほうの巻尺です。これにある液体を垂らすと……警部、照明を暗くして下さい。」

警察は高橋警部に部屋の照明を落とすように指示した。

高橋警部は察に言われた通りに部屋の照明を落とした。すると部屋は薄暗くなった。そして警察がある液体をもう一つの巻き尺に垂らすと巻尺は青白光を放ち出した。

皆「！」

警「これはルミノールです。つまりこの巻尺に血痕が付着していたということですよ。川鵜さん、認めてくれますね？」

警察は完全勝利を確信し刑事に見せつけるように川鵜に言い放った。

川「オレは知らない。何かの間違いだ！」

川鵜は自分が犯人とする警察の推理には納得しなかったようだ。

警「ではこれでどうです？」

警察はベッドにルミノールを垂らし始めた。すると、垂らした部分が青白く光った。

工「これは……。」

刑「恐らく巻尺の血痕を拭こうとした時に、誤って巻尺から手を放してしまって巻尺が巻き込まれて血が飛び散ったのでしょう。」

その後：

警「遅くなりました。すみません。」

ちょうど道が開通して駆けつけた警察官が来た。

刑「すいません、渋滞していたので。川鵜さん続きは署の方で……。」

「

高橋警部が川鵜に言った。

川「俺知らない！何もやっていない！何でもやってないくせに偉そうなこと言ってるんだよ。」

川鵜は抵抗したが警察に連行されて行った。

警「工戸川君この勝負貰ったよ。刑事さんから手を引いてもらおうか？」

警察は勝ち誇るように言った。

工「……。」

工戸川は無言のままだった。

刑「ではそういうことで工戸川さん、約束ですよ。」

工「……。」

すると警察は刑事を連れて行った。しかし固宮も森も平然としていた。

森（え？どういうことなの？孤独原君も刑事さんもどうしてこんなに落ちついていられるわけ？あなたたちは推理で負けたんでしょ？それはあなたたちにとっては許しがたい事実でしょ？しかも孤独原君が刑事さんを諦めることになるというのに……。）

森は刑事の方に悲しい視線をやりながら思った。森といえでもそう簡単に人の考えている所を言い当てることができるわけではなかった。

7 事件の鍵

芋「皆さん、犯人も捕まったことですし、今夜はパアツとやりませんか？」

オーナーが言った。

警「良いですねえ。是非そうしましょう。」

森「孤独原君……。」

森は心配になって孤独原に声をかけた。

弧「……。」

刑「……まだ勝負は着いちゃいねーよ。」

刑事は余裕の表情で言った。

刑「え？」

森は刑事から帰って来た意外な反応に驚きを隠せなかった。

すると……

刑「川鵜さんは犯人じゃない。江戸川は犯人にミスリードされちまったんだ。あいつは勝負に焦るあまりに冷静さを欠いていたからな。」

刑事は淡々と言った。）

森「だったらどうして言わなかったの？ 刑事さんだって……。」

森は刑事に抗議するように言った。

刑「森、お前が本心からそう思っているんだったらお前は刑事という探偵を見縊り過ぎてるぜ。あいつは普段こそ冷静なんて無縁だぜ。探偵として事件に臨めば^{のそ}冷徹に真実を見透かす探偵なんだぜ。俺は探偵として最大のライバルは他の誰でもなく、警部だと思ってるからな。」

刑事は精悍な顔つきをしながら言った。

刑「……なるほどね。だからあなたも刑事さんもあんなに落ち着いていられたってわけね」

森も淡々と応対した。

刑「そういうことさ。さっきの話だけど証拠も、手口も分かったんだ。けどあの謎が解けねーことには……」

刑事は考えが行き詰まった時の彼の癖である髪の毛を掻き^かむ^むるといふ行動をしながら言った。

森「あの謎？」

刑「……ってことなんだけどさ。」

刑事は自分の中で辻褄^{つじつま}の合わない部分を森に話した。すると、信じられない言葉が返ってきた。

森「あら、あんたはそんなことで悩んでいたわけ？」

森は拍子抜けしたように言った。

刑「え？」

刑事は森の拍子抜けしたというような表情に驚いた。

森「それは……というわけなのよ。」

……の部分にひそひそと何か言った。

森は優一が辻褄の合わないと頭を抱えていたことにいとも容易く答えを授けた^{さず}。

刑「そうか。そういえばそんな話を聞いたことがあったような……」

まあ謎は全て解けたぜ。サンキュー森、お前のおかげだぜ。」

笑みを浮かべた。

刑事は全ての謎が解け、犯人を追い詰める準備をするためにある所に向かった。

刑「警部！調べて頂きたいものがあるのですが……。」

刑事は高橋警部にある物を調べるように手配した。

そして刑事はある場所に向かった。

8 犯行内容

その夜

殺害された石森の部屋に忍び寄る人影があつた。その影は部屋に入つて行つた。そして窓の方へ進んで行きそこに辿り着くと……花瓶を手にした。

「そう……ルミノール反応とはルミノールが酸化されてそれが励起^{れいき}状態の3-（マイナス）アミノフタル酸になり、さらに基底状態^{きてい}の3-アミノフタル酸に戻ろうとして発光という形でエネルギーを放出する現象のこと。励起状態とは原子や分子が不安定な高いエネルギー状態にあること。反対に基底状態とは最も安定した低いエネルギー状態にあること。そして励起状態の物質はエネルギーを放出して基底状態に戻ろうとする……。」

突然、暗闇の中から若い女性の声が聞こえた。

犯「だ、誰だ？」

影は辺りを見回した。

「通常、警察の血液鑑定においてはルミノール発光試薬はルミノール0.1g、無水炭酸ナトリウム5.0g、30%過酸化水素水15.0ml、水100.0mlを混ぜて作る。これを噴霧^{ふんむ}して暗闇で見た時に青白い光を発すればそれは血液と疑われる。」

影は慌てふためいて辺りを見回した。

「でもね、それだけでは血液とは認定されないのよ。その後に入血証明検査をするわ。これによってその血液が人間の物か他の動物の物か分かるのよ。ちなみに血液型まで分かるわ。もちろん血液かどうかなんてことはすぐに分かるわ。そしてルミノール反応は血液中の錯体（中心原子と呼ばれる金属原子または金属イオンの周囲に配位子と呼ばれる分子またはイオンが結合している「配位結合している」化合物のこと）*に反応するから血液を使わなくても起こせる……例えば血液と過酸化水素水の代わりに漂白剤を使えばね。」

若い女性の声は続けた。

「だから江戸川がルミノールを巻尺やベッドシートに垂らしたら反応が出たんだ。しかし、ベッドシートについていた血痕と思われる物は血液とは色調が微妙に違った。」

今度は若い男性の声がした。

パチ

部屋に明かりが点いた。

刑「そうですね？真犯人の芋川オーナー。」

芋「何を言っているんだい？私はただ……。」

オーナーは慌てて弁解した。

刑「ただ？」

刑事はオーナーに続きを促した。

芋「戸締りの点検に來ただけだよ。」

刑「よくそう嘘が思いつきますね。じゃあその手に持っている花瓶は何ですか？」

刑事はオーナーに別の質問を突きつけた。

芋「こ、これは……。」

オーナーは咄嗟には弁解の言葉が出て來なかつた。

刑「まさかこんな時間に花に水をやりに來たなんてことはないですよね？」

刑事はオーナーの先手を取るような言葉を紡いだ。

芋「悪いかね？さつき水をやり忘れてしまつてね。」

オーナーは刑事の言葉に飛びついた。

刑「ということはその花瓶は元からこのペンションにあつてオーナーが毎日水をやっていたということですか？」

芋「そうだが、それが何か？」

オーナーは冷静さを取り戻しつつ答えた。

刑「その言葉を待っていましたよ。」

刑事は勝ち誇るように言つた。

芋「え？」

オーナーは刑事の言葉の意味が分からなかった。

刑「その花瓶は石森さんの持ってきたもの。石森さんは旅行先にも花瓶を持って来て花を生けていたと川鷲さんも証言していましたし先程、高橋警部に彼女の両親にも問い合わせてもらった結果、彼女はいつも旅行先に花瓶と花を持って行くのが習慣だと証言しています。さらにその花瓶からは石森さんの指紋のみが検出されていることも警察に調べてもらってあります。それに他の部屋には花瓶は一つもありませんでしたしね。つまりあなたが水をやる必要なんか一切ないんですよ。違いますか？」

刑事はオーナーに事実を突きつけた。

芋「……」

オーナーは黙り込んだ。

9 事件解決

刑「オーナー、どうしてこの花が枯れているのか分かりますか？」

刑事は再度の質問を投げかけた。

芋「……。」

オーナーは言葉を紡^{つむ}げなかった。

刑「昨日はとりわけ寒いということはなかった。しかしそこに氷が入られたんですよ。そしてあなたの犯行はこうです。あなたは川鵜さんが居ない時間を見計らって彼のアリバイを潰^{つぶ}してから石森さんの部屋へ行き、石森さんを殺害した。氷の刃で石森さんの頸動脈を切断することによってです。そしてその氷に付いた血を拭き取って花瓶の中に入れた。花瓶からはルミノール反応が出てきました。そして川鵜さんの部屋に漂白剤をつけた巻尺を置き、ベッドシートに絵の具に混ぜた漂白剤を垂らした。」

芋「私には何のことかサッパリだな。」

オーナーの頭には誤魔^{ごまか}化しの言葉しか浮かばなかった。

刑「しかしあなたはここで二つのミスを犯しました。一つ目は巻尺に漂白剤をつけたことです。二つ目はこのエンジのベッドシートにつけた絵の具が川鵜さんに気づかれないように本物の血とは微妙に色調が違ったことです。一つ目はベッドシートのルミノール反応と違ったら困るからだったでしょう。血液と漂白剤では発光の仕方が違うそうですからね。だから、川鵜さんは既に釈放されています。」

芋「だからと言って私が犯人だってことには……それに私が石森さんの部屋に入っただのは石森さんの遺体を発見した時が初めてだ！」

オーナーは頭に血が上り始めたらしく声を荒げた。

刑「まあ良いでしょう。……あなたが捜していたものはこれですね？」

刑事は袋に入った指輪を取り出した。

芋「！」

オーナーは驚きを隠せなかった。

刑「あなたは花瓶に氷の刃を入れる時にこの指輪を落としてしまった。それで後でそのことに気づいたあなたは回収に来た。あなたは『石森さんの部屋に来たのは遺体を発見した時が初めてだ』と言いましたよねえ？ だったらどおーしてこれがこの部屋にあるのですか？ お教え願いませんか？」

刑事はオーナーを追い詰めるにたる言葉を投げかけた。

芋「……石森……学が悪いんだ。あいつは私に貢^{みつ}がせるだけ貢がせて、私を捨てて川鵜と……」。

オーナーは項垂れながら言った。

芋「ご同行願えますね？」

芋「はい……」

オーナーは連行されて行った。

オーナーは以前石森と恋人だったが（矛盾しているけどご勘弁ください。）彼はその頃から川鵜と付き合っていて、オーナーに貢^{みつ}がせた金で遊んでいたということを後で知ってそれ以来、彼女と川鵜を恨んでいた。そして偶然石森と川鵜がオーナーのペンションに泊まりに来たので、以前から計画していた方法で川鵜に罪を被せて石森を殺害することを決意したとのことだった。

10 成果

―翌日―

森「良かったわね、刑事君。大切な刑事さんを諦めずに済んで。最も今回の犯人のトリックがあまりにも幼稚だったから当たり前だろうけれどね。」

警「さすが孤独原や。」

警部は刑事の肩を叩きながら言った。

刑「だから言っただろう？俺は負ける気はねーってな。」

刑事は当たり前だろという表情で言った。

警「刑事君、どうやら、君の勝ちのようだね。」

警察が刑事に言った。

刑「いや俺の勝ちじゃない。確かに俺達の勝ちだけど、それは森のおかげだ。森がルミノール反応のことを教えてくれたからだ。だから俺とお前の勝負は引き分けさ。江戸川。」

工「いや、僕の負けだよ。君は今までの成果を発揮したね。どうやら今回は勝負に焦るあまりに冷静さを欠いていた。約束通り、ボクは探偵を辞めるよ。」

警「その必要はないぜ。」

工「え？」

警「なんだって俺とお前の勝負は引き分けなんだからなあ。……それにお前が探偵を辞めたからって誰も喜ばねーぜえ。……これからも真実を追いつけるよあ。……なんだって推理は勝負するものじゃないからなあ。そうだろ、江戸川君。」

工「どうやら今回の僕は刑事君に何から何まで完敗ってわけか……警部さん、あなたは刑事君にこそ相応しい。」

警「当たり前や、刑事は腕を上げたんだ。なあ？刑事？」

刑「……ああ。」

刑事は照れながら返事をした。

刑「そういえば森はどうしてあんなことを知っていたんだ？」

森「あんたのほうこそ、私のことを見縊^{みくび}り過ぎていないかしら？あれくらいのは元々知っていたわよ。まあ他にも養母さんに教えてもらったことは結構あるけどね。養母さんはあなたたちのお父さんたちの捜査の相談に乗っているらしいからね。いくら名探偵でも化学の知識は養母さんには敵わないからね。」

刑「なるほどな。」

警「でも良かったな！。今回はそんなに大騒^{おおさわ}ぎになんなくて。」

高「では礼を言っぜ。ありがとよ。」

固「あたしも容疑者から外してくれてありがとうございました。」

川「私も一時はどうなることと思っていましたよ。でも刑事さんたちのおかげで無事、釈放することができました。ありがとうございます。」

宮「私のほうからも礼を言います。」

工「じゃあな刑事！」

警「もう帰るのか？」

工「ああ、また事件が起きたようだ。」

刑「へえ、頑張れよ。」

工「ああ、ありがとよお。」

刑「ふう、これで寂しくなるな。」

こうして山麓荘で起こった殺人事件は無事に解決した。

翌日刑事達は山麓荘を後にした。

10 成果（後書き）

ここまで見てくれた人、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8644m/>

山麓荘殺人事件

2010年10月11日05時29分発行